【優秀賞】愛媛朝日テレビ賞

「一人の人間として」

西条市立小松中学校　３年　能瀬　愛歩

「ゲン、わしゃうれしいんじゃい。ゲン、おまえだけじゃ。真剣に怒って、わしに向かってきてくれたのは。」

この言葉は、「はだしのゲン」に登場する吉田政二のセリフである。社会科の授業で「はだしのゲン」のアニメを見て以来、この言葉がずっと心に残っている。

吉田政二は、原子爆弾によって、ひどい火傷を負った。そして、周りの人から、「オバケ。」と言われたり「ピカの毒がうつるから、あっちへ行け。」と言われたりして、ひどい差別を受けていた。また、町の人だけではなく、家族からも嫌われていた。

そんな政二の世話を、ゲンがすることになった。今まで、何人もの人が政二の姿を見て逃げ出していた。だが、ゲンは逃げ出さずに政二の世話をした。世話をしている途中で、政二にきつい言葉を言われたりいじわるをされたりしたゲンは、ついに怒りを口にする。

「こんな仕事できるか。」

ゲンが帰ろうとしたそのとき、政二は言ったのだ。

「ゲン、わしゃうれしいんじゃい。ゲン、おまえだけじゃ。真剣に怒って、わしに向かってきてくれたのは。」と。

人間は見た目で、先入観を抱いたり差別したりする。私もそうだ。怖そうな顔つきをしている人、派手な服装や不潔な格好をしている人だと、近づくとなにかされそうで、恐怖や嫌悪を抱いてしまう。深く関わりたくないと思ってしまう。逆に優しそうな表情をしている人や清楚でセンスのいい服装をしている人には、安心感や信頼を抱く。私は、決して人を差別しているとは思っていないが、見た

目の印象だけで、その人の人間性まである程度決めつけていることには違いない。これも差別につながる見方なのだろうか。

政二は大火傷をして、外見は普通の人と大きく異なる。しかし、中身はみんなと同じ人間である。それなのに、町の人や家族は政二を人間ではなく、化け物として蔑み、遠ざけたのだ。

けれど、ゲンは違った。政二のお世話をし、腹が立ったときは本気で怒り、政二と向き合った。お世話をしたのは、お金をもらうためだったのかもしれないが、誰も近づこうとしない人間にぶつかっていくことは簡単ではない。ゲンは見た目にとらわれることなく、一人の人間として接した。このことが、家族にまで見捨てられた政二にとってどれだけうれしかったことだろう。人間が一番辛いと感じるのは、「人としての扱いをされない」ことと「無視される」ことではないだろうか。

政二はこんな言葉も言っている。

「ゲン、情けないのう。たった一枚の皮膚がはげただけで、人間の心はこうまで変わるかのう。」

差別はいろいろな場所で起きている。そして、たくさんの人が差別に苦しんでいる。学校で学習した部落差別を、政二のこの言葉に置き換えると、

「ゲン、情けないのう。部落に住んどると聞いただけで、人間の心はこれほど変わるかのう。」

となるように思う。

皮膚の色や顔の特徴が違ったり、考え方が違ったり、宗教や国の体制が違ったりするのはいけないことなのだろうか。今、世界では多様性を認めようという動きが広がりつつある。例えば、性については、以前は男と女の二つの認識しかなかったが、今では多くの性が存在することを理解する人が多くなっている。当たり前に言われていた「男らしさ・女らしさ」の言葉の中に、少数者を切り捨て、

差別を助長する種があったことに多くの人が気づく時代になっている。そして、「ジェンダーレス」など、性差別をなくすための活動が、生活全般に広がっている。

差別は簡単になくなるものではない。しかし、差別された人のつらさや心の痛みを、自分のこととして考えることが、解消の第一歩だ。そして、一人でも多くの人が、みんなが平等に暮らせる社会を作ろうと行動することが必要だ。そのためには、「当たり前」という概念を捨てることが大事だと思う。

この世は、多数派の考えで動いている。多数派の考えは、いずれ、世間の「当たり前」になる。だから、少数派の考えは、常識外れとなり、社会から切り捨てられ、差別の対象にさえされてしまう。差別者は「当たり前」のことなので、罪悪感を持つことがない。

世界にはさまざまな人がいる。見た目が違っても、考えが違っても、互いの個性として認め合えればいい。全ての人が笑顔で平等に生きられる社会をつくるためには、まず自分の中の「当たり前」を疑い、見直すことが大切だ。そんな思いの人々であふれた社会こそ、吉田政二が願った社会だと私は思う。